

イギリスのナショナルカリキュラム音楽における Appraising の変遷

梅比良 麻子

(本講座大学院博士課程前期在学)

A Change of Appraising in the National Curriculum (Music) in England

Asako UMEHIRA

I はじめに

イギリスでは、1992年にナショナルカリキュラム音楽 (Music in the National Curriculum) が制定され、法的拘束力をもったカリキュラムが実施されるようになった。そのカリキュラムでは、音楽を単に聴くだけでなく、批評や評価の作業を含む積極的聴取を意味するものとして、音楽教育界では馴染みのない Appraising という用語が用いられている。Appraising は、初版のナショナルカリキュラムで明確な定義づけが行われなかったために、現場の教師にいくらか混乱を招いたとされているが、同時にイギリスの聴取活動の発展に貢献したとされている¹⁾。では、Appraising とはいかなるものであろうか。

Appraising に関する研究としては、Flynn & Pratt (1995) がその定義づけを試みている。また、Angela (2008) は、Appraising に焦点をあてた研究はあまりされてこなかったことを指摘した上で、Appraising の活動として、作曲における生徒の言語活動に焦点をあてたアクションリサーチを行い、生徒たちの言語活動の類型を導きだしている²⁾。しかしながら、ナショナルカリキュラム音楽が、1995年、1999年、2007年の3回の改訂を経るなかで、Appraising という活動がどのように位置づけられ、どのような内容が示されているのかを明らかにした研究はまだない。そこで、本研究では、イギリスのナショナルカリキュラム音楽における Appraising の変遷を辿ることで、Appraising の内容がどのように変化していったのかを明らかにすることを目的とする。

II Music Working Group による Appraising の内容

Appraising は、Music Working Group (以下、MWG) がナショナルカリキュラム音楽の草案を作成する議論において初めて採用された。MWG による最終報告書³⁾ には、法的拘束力のない Appraising の到達レベルが記載されており、これによって MWG が意図した Appraising の具体的内容を見ることができるとしている (巻末資料1)。Appraising の到達レベルは、10のレベルから構成されており、各レベルごとにその到達内容と例が示されている。

各レベルの到達内容は、a)、b) の2つから成っているが、a) は主に音楽的要素の認識、識別、b) は主に a) を言語によって表現する活動である。a) は、音楽的要素に対する反応に始まり、特定の要素を認識することへ移り、レベルが上がるにつれて、要素だけでなく時代やジャンル別に音楽の性質を識別するよう発展していく。b) に関しては、a) で認識した音楽的要素について簡単な言葉で話すことに始まり、要素がもつ効果について説明、議論し、レベルが上がるにつれて楽譜を用いながら知識を応用して判断するように発展していく。ここで注目すべきは、a) の音楽的要素の認識における初期段階の1～3レベルの具体例に、音楽に対する身体的反応が見てとれる点である。この身体的反応は、音楽を聴き取り、それについて身体を使って表現するというものである。Appraising の身体的反応の例は以下である。

・音楽に合わせて動き、静寂で立ち止まり、音楽が静かな時に忍び足で動く。(レベル1)

- ・音楽の音程が高くなると身体をのばし、低くなると身体をまるめる。(レベル2)
- ・よく知っている歌の音程をなぞるために手を上げたり下げたりさせる。(レベル3)

以上のように、MWGが示す Appraising の内容は、音楽的要素を認識し、それを表現することであった。また、音楽に対する認識を示す手段として言語活動を掲げているが、初期段階においては言語活動のみならず身体的反応もその手段のうちを含むと考えていたということがいえるだろう。

Ⅲ ナショナルカリキュラム音楽 (1992, 1995, 1999, 2007) における Appraising の内容

(1) ナショナルカリキュラム音楽 (1992) における Appraising

初版のナショナルカリキュラム音楽 (1992)⁴⁾ は、ステージ1 (5歳～7歳)、ステージ2 (7歳～11歳)、ステージ3 (11歳～14歳) に分けられ、到達目標、学習プログラム、法的拘束力のない具体例から成っているが、その内容は、教育省長官の要求を反映し、MWGの最終報告書に大幅な修正を加えたものとなっている。カリキュラムによると、到達目標は、各キーステージで身につける能力を示しているとしており、到達目標1: Performing and Composing と到達目標2: Listening and Appraising として示された。

到達目標 Listening and Appraising の下には、目標事項があり、目標事項ごとに学習プログラム、具体例が記載されている (巻末資料2)。目標事項に関して、キーステージ1はa), b) の2つの区分から成り、キーステージ2, 3は, a), b), c) の3つの区分から成っている。キーステージ1のa) は、生徒自身が作曲・演奏した音楽や日常の音を聴き、音楽的要素について話すこと、b) は、生徒自身が作曲・演奏した音楽に加え、録音された音楽を聴き、音楽的要素について話すことが記されている。一方、キーステージ2, 3のa) は、幅広い音楽の中の特定の要素を詳細に聴き分けるように発展していく。そして、b) には録音された音楽を用いた音楽史の理解が加えられている。c) は、生徒自身が作曲・演奏した音楽や録音された音楽の分析、評価を行い、歴史的文化的背景を交えながら批判的分析をするように発展していく。

ナショナルカリキュラム音楽 (1992) は、MWGによる Appraising の到達レベルと比較すると、音楽的要素を認識し、話すという大筋は共通しているが、身体的反応に関しては目標事項a) の3) のみに記載されるに留まっている。一方、音楽史の学習がキーステージ2から始まり、キーステージ3では、これらの知識を応用しながら音楽の分析を行うという高度な能力が求められており、教育省長官の意向を色濃く反映したものとなっている。

(2) ナショナルカリキュラム音楽 (1995) における Appraising

ナショナルカリキュラム音楽 (1995)⁵⁾ は、初版のカリキュラムの過剰な分量に対する現場の教師の批判を背景として改訂されたものである⁶⁾。この改訂によって、学習内容の簡素化と明確化が図られ、教えるべき教材が削減された。また、改訂の大きな特徴として、全教科に「共通の必要事項」が示され、全ての生徒に適切な方法で教授する機会を与えることが推奨されたほか、言語の使用、情報技術に関する記述が盛りこまれた。

また、カリキュラムには、学習プログラムに並べられた項目は必ずしも教授すべき順序や体系を表すものではないという注意書きや、イタリックで記された例は法的拘束力をもたないという説明があり、教師のある程度の自由裁量を許容しようとしていることが見てとれる。

ナショナルカリキュラム音楽 (1995) における Appraising は、学習プログラムと到達目標の記述に見ることができる (巻末資料3, 4)。

ナショナルカリキュラム音楽 (1995) の各キーステージの学習プログラムには、e, fの2項目から成る学習の機会があり、eにはa～cの3つの学習内容、fにはdとfの2つの学習内容がそれぞれ記されている。学習の機会eは、知識を応用しながら音楽を聴いて理解することであり、その下のa～cの教えられるべき内容を見ると、音素材、音素材や音楽的要素の効果、時代や場所などが段階的に記されている。学習の機会fは、生徒自身が作曲、演奏した音楽や録音された音楽に反応し、評価することである。その下の教えられるべき内容dは、様々な音楽の性格や様式の識別が示されており、eは、音楽に関する言語表現となっている。ナショナルカリキュラム音楽 (1995) は、初版のナショナルカリキュラム音楽 (1992) と比較すると、全体的に簡素化されており、音楽史の学習の強調は特には見られない。また、MWGに

よる Appraising の到達レベルの特徴であった身体的反応の記述はなくなっており、言語による表現のみとなっている。

(3) ナショナルカリキュラム音楽（1999）における Appraising

第2次改訂は1999年に行われたが、これは当初から予定していた改訂である。ナショナルカリキュラム音楽（1999）⁷⁾には、カリキュラムの構造に関する説明があり、学習プログラムや到達目標を位置づけるなど、カリキュラムの扱い方を明確にしている。注目すべきは、音楽を通して促進される能力について様々な視点から説明されており、音楽科の役割について言及しているということである。

また、「音楽の重要性」と題して、音楽科の特徴について以下のように説明している⁸⁾。

音楽の重要性

音楽は、力強く、ユニークなコミュニケーションの形である。それは生徒が感じたり、考えたり、活動したりする方法を変えることができる。それと同時に知性と感情をもたらし、個人的な表現、反応、感情的発展を可能にする。音楽は、過去や現在の文化の不可欠な部分として、家や学校、より広い世界の間的重要な連携を前進しながら、生徒が自分自身を理解したり、他の人と関わったりすることを手助けする。音楽の教授は、幅広い種類の音楽を聴いたり鑑賞したり、音楽の質について判断する生徒の能力を向上させる。これによって個人や共同で作曲されたアマチュア音楽の様々な形式を活発に関係させ、集団の帰属意識や連帯感の感覚を向上させる。また、自制心、創造性、美的感覚、達成感を強める。

その他、全体の教授に要求されるものとして、全ての生徒のための効果的な学習機会を提供すること、カリキュラムを横断する事項として、言語、情報、コミュニケーション科学技術の使用に関する説明がされている。これらのことから、第2次改訂により、カリキュラム全体で取り組む事項と、カリキュラムにおける音楽科の位置づけがより明確になり、音楽科が存在する所以が強調されているといえよう。

一方、ナショナルカリキュラム音楽（1999）の学習プログラムは、「知識、技術、理解」と「学習の範囲」から成り、「知識、技術、理解」は以下の音楽の側面から教えられるべきとされている。

- ・ 声楽と器楽を通じた音の操作－演奏技術
- ・ 音楽のアイデアの創造と発展－作曲技術
- ・ 反応と批評－appraisingの技術
- ・ 聴取と知識、理解の応用

この4つの側面のうち、第4の「聴取と知識、理解の応用」は、演奏技術、作曲技術、Appraisingの技術が相互に関係することを通して発展させられるべきとされている。また、「学習の範囲」は、活動の人数構成や、様々な時代や文化の音楽や生演奏、録音された演奏など、扱うべき音楽について示している。

次に、ナショナルカリキュラム音楽（1999）における Appraising を見ていく。ナショナルカリキュラム音楽（1999）において、Appraising は反応と批評とされており、演奏、作曲に並ぶ技術として位置づけられた。また、「聴取と知識、理解の応用」は、演奏、作曲、Appraising の活動を通して行われるべきものとされ、Appraising それ自体に聴取を含まないことを明らかにしている。Appraising の内容に関しては、キーステージ1～3の学習プログラムに見ることができる。

表1 ナショナルカリキュラム音楽（1999）の学習プログラム

<p>キーステージ1 反応と批評－appraisingの技術－ 3 生徒は以下の方法を教えられるべきである： a 音楽に関する考えや感情を動きやダンス、表現豊かで音楽的な言葉を使いながら、探求したり表現したりする。 b 自分自身の作品を改善する。</p>
<p>キーステージ2 反応と批評－appraisingの技術－ 3 生徒は以下の方法を教えられるべきである： a 音を分析し比較する。 b 音楽に関する考えや感情を動きやダンス、表現豊かで音楽的な言葉や音楽用語を使いながら、探求したり説明したりする。 c 意図された効果に関して、自分自身の作品や他の人の作品を改善する。</p>
<p>キーステージ3 反応と批評－appraisingの技術－ 3 生徒は以下の方法を教えられるべきである： a 音楽作品を分析し、評価し、比較する。 b 自分の意見を正当化するために、表現豊かな言葉や音楽用語を使いながら、音楽に関する考えや感情を伝える。 c 自分の音楽的アイデアを調整し、自分や他の人の作品を洗練し、改善する。</p>

(* Department for Education and Employment, *The National Curriculum for England(Music)*, London: HMSO, 1999. より、訳出)

キーステージ1の内容は、a、bの2項目から成り、aは音楽に関する考えを身体や言語を用いて表現すること、bは音楽作品の改善である。キーステージ2と3の内容は、a項目として音楽の比較、分析が組み込まれ、徐々に分析的活動へと発展している。そしてキーステージの2と3のbにキーステージ1のa、cにキーステージ1のbが充てられている。ナショナルカリキュラム音楽（1995）のカリキュラムと比較すると、身体的反応の記述がキーステージ1,2に戻っている。また、自分や他の人が作曲したものを改善する活動が新しく提示されたことから、音楽に対する思考を表現する手段として、身体表現、言語活動に加え、作曲活動における音楽それ自体の操作の3つが示されたといえることができるだろう。

(4) ナショナルカリキュラム音楽（2007）における Appraising

2007年に行われた第3次改訂は、キーステージ3のみ行われた。キーステージ3のナショナルカリキュラム音楽（2007）は、カリキュラム全体の目的の下に音楽の重要性を示しており、音楽のコミュニケーションの独特の性質や文化的理解の発展、集団活動による他人と活動する能力について触れている。また、音楽学習における批評の技術について説明されていることに加え、主要概念として「批評的理解」について定義された。活動の区分に関しては、演奏、作曲、聴取という3つの活動から独立して「批評と評価」という活動が提示され、音楽活動の捉え方が変更されている。批評的理解に関する定義と「批評と評価」の活動は、以下のとおりである⁹⁾。

批評的理解

- a 音楽に関わり、分析し、考え方を発展させ、意見を批評すること。
- b 意見を支えるために幅広い音楽的背景やスタイルの経験を参考にすること。

批評と評価

- a 音楽作品を分析し、批評し、評価し、比較する。
- b 様々なスタイル、ジャンル、伝統の音楽の慣習や背景の影響を認識する。
- c 自分の意見の根拠を示すために、表現豊かな言葉や音楽用語を用いながら、音楽についての考えや感じたことを伝える。
- d 自分の音楽的アイデアを調整し、自分や他人の作品を洗練し、改善する。

次に、カリキュラムの内容から Appraising について見ていく。キーステージ1, 2で保持されている

Appraising は、演奏、作曲と同等のものとして扱われており、「聴取、知識と理解の応用」を分けて提示することで聴取の重要性を示しているが、今回のキーステージ3における改訂では、Appraising という名目の活動がなくなった。演奏、作曲、聴取の3つの活動と「批評と評価」から構成されており、批評の技術に重点を置いていることがうかがえる。また、Appraising という単語が批評的理解に関する注意書きの中で一度使用されていることや、キーステージ1、2における Appraising の技術が「反応と批評」として提示されていたことから、Appraising は、キーステージ3で「批評と評価」という名称の活動に置き換えられたとすることができるだろう。そこで、キーステージ3において、Appraising にかわるものとしての批評的理解の定義と「批評と評価」の内容を見ていきたい。

批評的理解の a の定義と「批評と評価」の a 項目によると、まず第1に挙げられる特徴は、音楽それぞれの批評である。そして、批評的理解の b 定義と「批評と評価」の b 項目から、音楽に関して根拠をもって批評することを目的とした音楽に関する知識の学習が挙げられる。また、「批評と評価」の c 項目では、音楽に関する言語活動、d 項目は、作曲活動における音楽それ自体の操作が提示されている。ここでは、キーステージ1、2で見られた、音楽について感じたことや考えたことを表すための身体的反応は含まれていない。このことから、キーステージ1、2における Appraising は、音楽に関する自分の意見の表現の手段として、言語表現に加えて身体表現を含むものとして限定されたとすることができるだろう。そして、キーステージ3では、音楽を分析し、自分の意見を根拠をもって言葉で表現するために、音楽の知識を学習することが含まれ、キーステージ1、2と比べてより高度な思考が求められているとすることができるだろう。

IV ナショナルカリキュラム音楽における Appraising の変遷

Appraising は MWG によって採用された後、定義づけが行われないうままにカリキュラムで使用され続けたが、その内容は幾分変わってきた。以下にカリキュラム改訂による Appraising の扱いをおさえる。

MWG は当初、音楽活動全般における聴取の重要性を掲げた上で、単に音楽を聴くだけでなく、音楽を解釈し、評価するという積極的聴取の意を強調することを示すために、演奏と作曲に並ぶものとして Appraising を採用した。その内容は、音楽的要素を聴き取り、聴き取ったものや自分の考えを身体で表現したり、言葉で話したりすることであった。

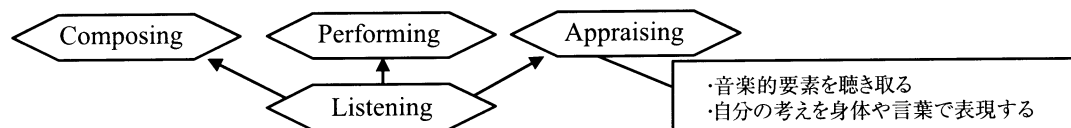


図1 Appraising 採用当初の MWG による見解

そして、初版のカリキュラムでは、Appraising は到達目標として Listening と併記された。その内容は、音楽に関する身体表現はあまり見られず、音楽史の学習が加えられ、音楽史の知識を応用しながら音楽を批評するという高度な技術が求められていた。

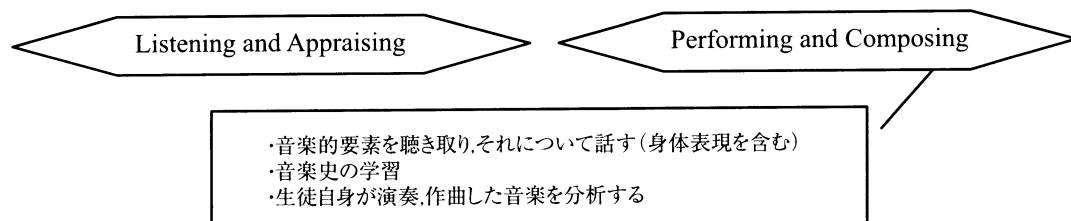


図2 ナショナルカリキュラム音楽 (1992)

第1次改訂のカリキュラムは、教師の自由裁量を許容するため、全体的に簡素化された。また、この改訂により、カリキュラム全体の「共通の事項」として言語の使用と情報技術に関する説明が加えられた。

Appraising は、Listening と併記されたままであるが、身体表現の記述は一切なくなり、音楽史の学習も強調されているとは言えず、知識を応用しながら音楽を理解し、音楽について言語で表現することが示されていた。

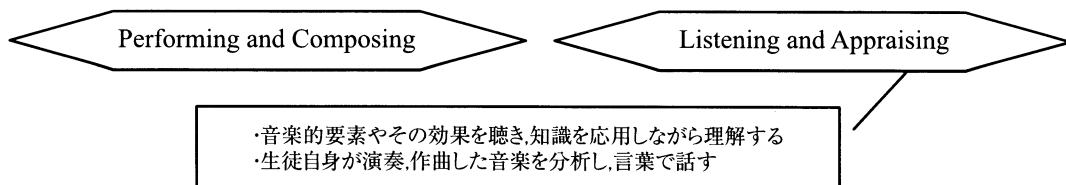


図3 ナショナルカリキュラム音楽 (1995)

第2次改訂のカリキュラムでは、カリキュラム全体の構造が明確化され、音楽の重要性が明記されるなど、カリキュラム全体における音楽科の役割が示されている。音楽科では、演奏技術、作曲技術、Appraising の技術、「聴取と知識、理解の応用」という4つの音楽の側面を提示し、第4の「聴取と知識、理解の応用」は他の3つの技術が相互に関連する中で発展させられるとしていた。「聴取と知識、理解の応用」は、まず音を集中して聴くことに始まり、音楽的要素がどのような効果をもたらしているか、音はどのように生み出され、どのような方法で描写することが可能なのか、音楽はどのような目的で使用されるのかなどを教えられるべきとされている。この改訂によって、音楽の全ての活動を通して、音楽を聴き、音楽とはどういうものなのかを理解することが求められたことになり、活動の提示の仕方が大きく変わったのである。一方、Appraising は、聴取と切り離され、反応と批評の技術であると初めて明記された。Appraising の内容に関しては、音楽を評価すること、それについて話すことに加え、作品を改善することが新しく提示され、3つの観点で整理された。すなわち、音を組み合わせる音楽を生み出す活動は作曲の活動であるが、それを改善していく活動はAppraising の活動であると位置づけられたことになる。また、この改訂によりキーステージ1、2のみに身体表現が戻ってきた。

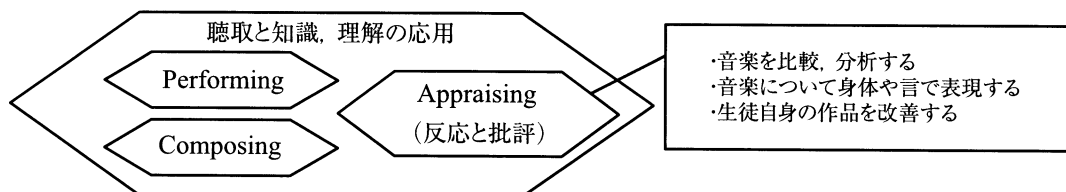


図4 ナショナルカリキュラム音楽 (1999)

第3次改訂は、キーステージ3のみに于行われた。活動の区分に関しては、演奏、作曲、聴取の活動がまとめて示されたほか、Appraising に取って代わって「批評と評価」の名称の下にその活動が示された。キーステージ1、2におけるAppraising と比較すると、キーステージ3の「批評と評価」は、音楽について聴き取ったことや自分の意見を表現する手段として身体表現は含まず、音楽に関する知識を深めた上で、自分の意見を根拠をもって表現できるようになることが求められていた。また、音楽について根拠をもって言葉で説明する際に必要な音楽の背景などの知識については、演奏、作曲、聴取の活動を通して認識するべきであるとされており、これらの3つの活動で音楽に関する知識を得ることは「批評と評価」の活動に分類された。すなわち、キーステージ3では、様々な活動を通して最終的に音楽の批評や評価ができるようになることが重要視されているといえよう。

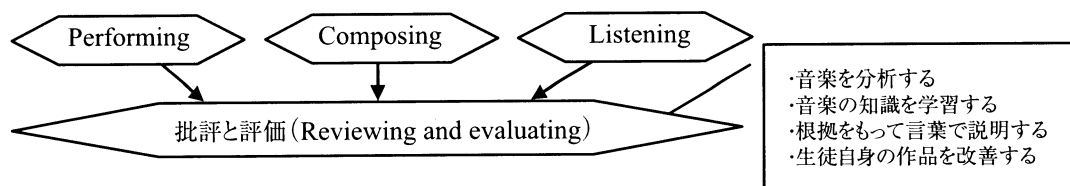


図5 ナショナルカリキュラム音楽（2007）：キーステージ3

以上のことから、Appraising は、第3次改訂によってキーステージ1、2に限定されて用いられ、キーステージ3の「批評と評価」の活動と区別されたのである。このことから、Appraising は、批評と評価の初期段階の活動として位置づけられたといえる。

V おわりに

本研究では、イギリスのナショナルカリキュラム音楽における Appraising の活動に焦点を絞り、その変遷を辿った。音楽教育界で使用する事のない Appraising という用語は、当初、積極的聴取を意味するものとして採用されたが、Appraising という活動を音楽活動の1つとして扱うにあたり、音楽を積極的に聴取するとはどういうことなのかを突き詰めていくと、音楽に対する批評や評価の活動の重要性を提起することとなった。そして、ナショナルカリキュラム音楽において、批評と評価の活動は、演奏や作曲などの活動に匹敵する重要な活動となっていった。さらに、2007年にキーステージ3で行われた改訂によって、演奏、作曲、聴取などの活動によって得た知識を批評と評価に生かすことが求められ、全ての活動を通して批評と評価に取り組んでいくことが示された。イギリスでは、音楽の学習は批評と評価の活動において行われるものと考えられているのである。音楽教育は、感覚的性質が強調される傾向にあるが、批評や評価という音楽に関する思考を音楽における主要な活動と位置づけるならば、思考を伴う知的活動としての音楽教育の性格を強調することができるだろう。

また、カリキュラム改訂を経て、Appraising の内容は、聴取活動を含むのかどうかや、音楽に関する自分の意見の表現の手段として何を含むのかに変容していった。Appraising に関する考察から言えることは、聴き取ったことや音楽に関する自分の意見を表現する際の手段として、身体表現、言語表現、音楽表現の3つの手段が存在するということである。これらは、生徒の思索的過程を表すものでありながら、生徒の学習を評価する対象にもなる。一方、我が国の『学習指導要領音楽』においても平成20年度の改訂により、イギリスと同様に音楽について批評することが求められ、言語活動の重要性も言及されてきている。この点において、我が国に対し、音楽に関する自分の考えを表現する際の手段として、言語表現だけでなく、身体表現や音楽表現の可能性を示唆したといえるのではないだろうか。

引用・参考文献

- 1) Pitts, S., *A Century of Change in Music Education :Historical Perspectives on Contemporary Practice in British Secondary School Music*, Ashgate, 2000, p.161.
- 2) Angel, E., Appraising composing in secondary-school music lessons, *Music Education Research*, 10, Vol. 10, No.2, 2008, pp.307-319.
- 3) Department of Education and Science, *Music for ages 5 to 14 – Proposals of the Secretary of State for Education and Science and the Secretary of State for Wales –*, London: HMSO, 1991.
- 4) Department of Education and Science, *Music in the National Curriculum(England)*, London: HMSO, 1992.
- 5) Department for Education, *Music in the National Curriculum (England)*, London: HMSO, 1995.
- 6) Lowton, D., Plimmeridge, C., Swanwick K., Music and the National Curriculum in Primary Schools, *British Journal of Music Education*, 11(1), 1994, pp.3-14.
- 7) Department for Education and Employment, *The National Curriculum for England (Music)*, London: HMSO, 1999.

8) Ibid, p.14.

9) Department for Education and Employment, *Programme of study for key stage 3 and attainment target(Music)*, London: HMSO, 2007. pp.180-181.

巻末資料1 Music Working Group による法的拘束力のない Appraising の到達レベル

レベル	到達の記述	例
1	生徒達は以下のことが可能であるべきである。 a) ダイナミクス, 速度, 拍子, 音色, 構造の点から, 音楽, 静寂, 環境音を認識し, 反応する。 b) 様々な方法で生み出された音を聴き, それについて話す。	音楽に合わせて動き, 静寂で立ち止まり, 音楽が静かな時に忍び足で動く。 音の一覧表で, 物音を比較し, 話す。 大きい/静か, 短い/長い, 同じ/違う, 始まる/止まるなどの言葉を使用する。
2	a) 音楽を注意深く聴き, 音程, 長さ, リズムを含む音楽的要素に反応したり認識したりする。 b) 表現豊かな目的で, 聴いたことのある多様な音楽の中で音楽的要素が用いられる方法を説明するために簡単な用語を使用する。	音楽の音程が高くなると身体をのびし, 低くなると身体をまるめる。 生徒の名前に合わせて手拍子をする。 様々な祭りや式典のために, 音楽がどのように適切な雰囲気を作り出すのかについて議論する。 より大きい/小さい, より高い/低い, より長い/短いというような言葉を使用する。
3	a) 旋律を含む, 音楽的要素の中の相違に反応し, 区別する。 b) 様々な形式や文化, 過去や現在の多様な音楽を聴き, その性格や顕著な特徴を認識する。	よく知っている歌の音程をなぞるために手を上げたり下げたりさせる。 簡単な用語で, 生徒達が歌ったり踊ったりしたことのある舟歌やリールの歴史的, 社会的, 文化的背景について話す。
4	a) 音楽的要素をより正確に区別するようになる。 b) 多様な音楽を聴き, その中の音楽的要素の使用の効果を評価し, 単純な用語で好みを表現したり根拠を示したりする。	打楽器アンサンブルの多様な楽器を聴き, 認識する。 ガムランの旋律の終わりに低いゴングを聴く。 ダンス組曲の動きを比較する。 テレビアニメで使われた音楽の適切さについて議論する。
5	a) 多様な音楽的形式の中の音色, テクスチャ, 続いているリズムや旋律のパターンの違いを区別する。 b) 多様な音楽的形式のいくつかの知識を認識し, 説明する。	聴きなれた旋律が内声やバス声部に現れる時, その旋律を認識する。 アフリカのドラム演奏における独特なリズムを認識する。 フォークソングや聴きなれた歌のポピュラーな編曲について議論する。
6	a) 要素を認識し識別する。要素は, 単純な和声, 複雑なリズムや旋律のパターンや, 幅広い声楽や器楽におけるそれらの使用を含む。 b) 多様な時代や文化の幅広い伝統やアイデアが記録されているいくつかの楽譜を用いて, 聴いたことのある音楽の知識を説明する。	ポップミュージックの作品の和音の変化を認識する。 インドネシア, インド, アフリカの音楽で使用されているリズムパターンを認識し, 区別する。 ロマン派の音楽を認識し, それについて話す。 現代音楽の作品を聴きながら楽譜を目で追う。
7	a) 多様な時代や文化の音楽における固有の音色, テクスチャ, 和声, パターンを分析する。 b) 聴くことを通して, 音楽的アイデアを適切な記譜に関連させ, 楽譜や解説に関して, 音楽の記譜や構造, 形式的な慣習の知識について説明する。	スコットランドのフィドル音楽を認識し, それについて話す。 転調を認識する。 古典的なメヌエットやトリオの楽章の演奏の中で楽譜を目で追い, その構造や演奏法について話す。
8	a) 音色, テクスチャ, 和声的旋律のパターンから, 特定の時代もしくは文化において聴かれる音楽の共通の表現形式を認識する。 b) 聴いたことのある多様な形式の音楽について, 批判的な評価をしたり, 分析したりする。	ブルース作品の真の演奏を聴き, 認識し, 議論する。 ミュージックコンクレートの例を認識する。
9	a) 音楽的性格を認識し, より複雑な音楽的アイデアを適切な記譜に関連づける。 b) 聴いたことのある多様な形式, 時代, ジャンルの音楽について, より詳細で批判的な評価や分析, 説明を行う。	ホモフォニー, ポリフォニー, ヘテロフォニー, モノフォニー, 旋律と伴奏のような音楽的テクスチャを認識する。 20世紀の音楽の例を聴き, その作曲家の名前を考え, そしてそのような選択をした理由を交えながら, その音楽の主な性格について話す。 同じ作品における2つの演奏を比較する。

10	<p>a) 音源や楽譜を使用しながら、幅広い複雑な音楽作品における顕著な性格を正確に定義する。</p> <p>b) 幅広い形式、時代、ジャンルから、そして多様な表現形式によって、聴いたことのある音楽についての正しい判断、批判的な分析、説明を行う能力を示す。</p>	<p>音源や楽譜を参考に、コンピュータを使用して生み出されたり加工されたりした音楽について話す。</p> <p>ポップ音楽 授業、学校もしくはプロのコンサートで聴いた作品の詳細な批評を書く。</p>
----	--	---

(* Department of Education and Science, *Music for ages 5 to 14 - Proposals of the Secretary of State for Education and Science and the Secretary of State for Wales* - , London: HMSO, 1991. pp.42-44. より, 訳出)

巻末資料2 ナショナルカリキュラム音楽 (1992)

到達目標2: Listening and Appraising		キーステージ1
<p>音楽史に関する知識や我々の様々な音楽的遺産、多様な他の音楽的伝統等を含む音楽の聴取・価値判断の能力の発達</p> <p>キーステージの目標事項</p> <p>キーステージ1の終了期までに生徒は以下の事を可能にするべきである:</p> <p>a) 異なる時代、文化、異なる形式をもつ音楽の小曲を相違点や類似点に気付いたりしながら注意深く聴いたり、反応したりする。</p> <p>b) 生徒自身が出したり、聴いたり、演奏したり、作曲したりした音楽や音について、簡単であるが適切な専門用語を用いて話す。</p>	<p>学習プログラム (到達目標2に基づく)</p> <p>学習プログラム</p> <p>生徒は以下の事項を行うべきである:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 生徒自身が作曲した音楽や他人が作曲した音楽を注意力と集中力をもって聴くようになり、以下のような主な音楽の要素の幅広い特徴をつかむ。 音高 — 高い/低い 保持 — 拍; リズム; 長い/短い音 速さ — 速い/遅い 音色 — 音の質 特徴 — 単音/いくつかの音 強弱 — 大きい/小さい 構造 — パターン; フレーズ; 反復/対比 静寂 2) 日常の全種類の音を聞き、発見し、創作し、比較し、それについて話す。 3) 動きや踊り、または他の表現方法によって、音楽的要素、性質、小曲の雰囲気に対応する。 4) 生徒自身が作曲したり編曲したりしたものはもちろんのこと、有名な作曲家や演奏家による作品について、様式の対比を示しながら様々な生の音楽や録音された音楽について話したり、聴いたりする。 5) 音やリズムが独特の効果をもたらすためにどのように音楽の中で用いられているのかについて話し合ったり、様々な時代や場所の音楽のいくつかの異なる性質について認識したりするようになる。 	<p>具体例</p> <p>生徒は以下の事項を行うことができる:</p> <p>その楽器から出る音のみで演奏されている楽器を認識する。</p> <p>生徒自身が出した音について考え、もしその音がより速く、より高く、小さくなった時、その効果はどのようなものなのかを考える。</p> <p>教室の外で聞いた音を認識し、それを音楽的な語彙を使って記述する。 音楽に合わせて身体を揺らし、ジャンプやスキップをして、静寂時に立ち止まり、音楽の拍に合わせて動く。また、小曲の雰囲気を表現するために色や形を使う。</p> <p>ハイドンの交響曲「驚愕」やブリテンの「青少年のためのオーケストラ」を聴き、それについて話したり、他人に何が自分にそう感じさせたり考えさせたりするのかについて教える。 様々な祝典や祭りのために作曲された音楽がなぜ適切な雰囲気を作り出しているのかについて話し合う。 チャイコフスキー、モーツァルト、ストラヴィンスキーの小品を聴いて、それについて話す。 サン＝サーンスの“動物の謝肉祭”の中で様々な動物を表現するためにどのように音が使われているのかについて話し合う。 生徒の家族が若い頃、どんな音楽を歌い、聴いていたのかを知り、共通の特徴について話し合う。 世界の様々な地域の民族音楽を歌い、それらの類似点や相違点について話し合う。</p>

到達目標 2 : Listening and Appraising		キーステージ 2
<p>音楽史に関する知識や我々の様々な音楽的遺産、多様な他の音楽的伝統等を含む音楽の聴取・価値判断の能力の発達</p> <p>キーステージの目標事項</p> <p>キーステージ2の終了期までに生徒は以下の事を可能にするべきである：</p> <p>a) 楽器を聴き分けたり、性質や雰囲気の変化に反応したりして、主な音楽の要素を認識しながら様々な種類の音楽を注意深く聴く。</p> <p>b) 音楽史の主な特徴を理解し、多様な音楽の伝統を認識する。</p> <p>c) 音楽的な作品や演奏の簡単な分析や評価を述べ、話し合い、企てる。</p>	<p>学習プログラム（到達目標2に基づく）</p> <p>学習プログラム</p> <p>生徒は以下の事項を行うべきである：</p> <p>1) 音楽の要素の理解を深め、それらを適切な語彙で表現し、それらに関係するいくつかの符号を解釈する能力を発達させる。</p> <p>音高 一旋律；和音 保持 一拍；拍子とリズム 速さ 一速さの推移 音色 一声／楽器の音質 特徴 一旋律、伴奏、ポリフォニー 強弱 一音量の推移；アクセント 構造 一反復；対比；簡単な形式</p> <p>2) 一連の楽器の単一の音や、組み合わせられた音を聞き分けるようになる。</p> <p>3) 初期、クラシック、後世に至る一連の楽曲や声楽曲を聴く。</p> <p>4) 著名な作曲家の作品を聴き、彼らの社会的、歴史的背景や音楽の伝統の発展の重要性を学ぶ。</p> <p>5) 授業で聴いた、彼ら自身の作品や演奏を含む音楽について話す。</p>	<p>具体例</p> <p>生徒は以下の事項を行うことができる：</p> <p>ムソルグスキーの“展覧会の絵”を聴いて、音、構造、表現の工夫がそれぞれの絵画を表現するためにどのように使われているのかを熟考する。</p> <p>コーブランドの“ロデオ”で使われている楽器を聴き分ける。 打楽器アンサンブルの様々な楽器を聴き、認識する。 ジャズ演奏を聴き、ソロの楽器を認識する。 中世の舞曲、シューベルトの“鱈”のような室内楽曲、ホルストの“惑星”のような交響曲、オルフの“カルミナ・ブラーナ”のようなカンタータなどを聴く。 バッハ、ベートーヴェン、ワーグナー、ショスタコヴィッチのような作曲家の作品を聴き、彼らの影響や特徴について話し合う。</p> <p>独創的な作曲方法を背景とする初期の楽想やそれらがどのように発展したかについて説明する。 授業で聴いた作品の中の楽想やテーマの変化、発展の仕方を探る。 ヘンデルの“メサイア”、ドヴィツシーの“沈める寺”から楽節の雰囲気が反映しているものについて話し合う。</p>

到達目標 2 : Listening and Appraising		キーステージ 3
<p>音楽史に関する知識や我々の様々な音楽的遺産、多様な他の音楽的伝統等を含む音楽の聴取・価値判断の能力の発達</p> <p>キーステージの目標事項</p> <p>キーステージ3の終了期までに生徒は以下の事を可能にするべきである：</p> <p>a) 音楽の要素を認識したり、区別したりして、複雑さを増した幅広い様々な音楽を理解しながら聴く。そして様々な記譜法についての知識を説明する。</p>	<p>学習プログラム（到達目標2に基づく）</p> <p>学習プログラム</p> <p>生徒は以下の事項を行うべきである：</p> <p>1) 音楽的感覚を発展させたり、聴き取る際には詳細に気をつけたりする。また幅広い様々な様式の音楽の中の複雑な音楽の要素を認識し、識別し、区別するようになる。</p> <p>音高 一旋律の形；旋律の性質、</p>	<p>具体例</p> <p>生徒は以下の事項を行うことができる：</p> <p>ポピュラーソングの和音進行を識別する。 転調を認識する。 バッハのフーガやベートーヴェンの交響曲の中の特徴的な音楽の要素を述べる。</p> <p>ファッツ・ウォーラーやデューク・エリントンによる演奏を聴き、組曲の基礎として曲の構造</p>

<p>b) 様々な時代や文化による一連の音楽史の理解、音楽の歴史的發展に関する知識を示す。</p> <p>c) 一連の個人の音楽作品に対する知識や理解を示し、生演奏や録音された演奏を批判的に評価する。</p>	<p>和声の音程；様々な音階と様式、和声の組合せ、例えば拍子記号、音結合群、シンコペーション、三和音</p> <p>保持 一拍、拍子、リズム、例えば拍子記号、シンコペーション、限らない会話のリズム</p> <p>速さ 一拍の速さ；急速な変化、例えば和音、器楽編成、強弱；</p> <p>音色 一声楽、器楽、それらを用いて音を作る様々な方法、例えば様々な方法で演奏された単音の対比や楽器の対比；</p> <p>特徴 一独奏、旋律、伴奏、多声 音楽、楽器の比重</p> <p>強弱 一大きく；小さく；音量の推移；表現</p> <p>構造 一旋律；反復／対比；推移、発展；簡単な形式、例えばヴァース・コーラス、ロンド、ヴァリエーション；オスティナートや反復進行</p> <p>2) 五線譜、図形楽譜、和音記号を含む、様々な記譜を読み、使う。</p> <p>3) 管弦楽、室内楽、合唱、オペラ、バレエ、ジャズを含む、初期、クラシック、後世に至る一連の音楽を聴き、理解を發展させる。</p> <p>4) 一連の著名な作曲家による音楽の發展における貢献を理解する。</p> <p>5) 自分の意見を述べ、意見や好みを正当化し、様々な見方を熟考しながら他の生徒の作品を含む、授業で聴いた作品や演奏を評価する。</p> <p>6) 適切な語彙を使ったり、その社会的、歴史的、文化的背景に関係のある形式と能力の理解を示したりして、音楽を批判的に分析する。</p>	<p>がどのように用いられているかについて話し合う。</p> <p>ストラヴィンスキーの“火の鳥”と“カッシェイの踊り”の対比を識別する。</p> <p>総譜に沿って音楽を聴き、反復される節の位置を突き止める。</p> <p>例えばグレゴリオ聖歌、ヘンデルの“王宮の花火の音楽”のような管弦音楽、ヴェルディーの“イル・トロヴァトーレ”のようなオペラ、“帝”のようなジゼルとサリバンによるサヴォリアオペラ、プロコフィエフの“ロミオとジュリエット”のようなバレエ音楽、“ウエストサイド物語”のようなミュージカルなどを聴く。</p> <p>スコットランドのフィドルの音楽やインドのラーガ、インドネシアのガムランなどの伝統を認識し、それについて話す。</p> <p>タリス、モンテベルディ、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ワーグナー、ヴェルディー、チャイコフスキー、ドビュッシー、マーラー、ストラヴィンスキー、エルガー、シベリウス、ティベットの作曲家の音楽を聴き、話し合う。</p> <p>集団で演奏する曲が演奏されている時、簡単な総譜に沿って見る。その後、演奏の正確さや記譜の明確さについて話し合う。</p> <p>レノンとマッカートニーによる歌の二種類の解釈を聴き、個人的な好みを正当化し、彼らの個人の良い点について話し合う。</p> <p>よく知られている曲のフォークとポピュラーの編曲について話し合う。</p> <p>音楽の印象派の發展について話し合う。</p> <p>1939年から1945年の間、イギリスの戦時中に演奏され、歌われていた音楽を調べる。</p>
--	--	---

(* Department of Education and Science, *Music in the National Curriculum (England)*, 1992. より, 訳出)

巻末資料3 ナショナルカリキュラム音楽（1995）の学習プログラム

キーステージ 1		Listening and Appraising	
■ 4. 生徒は以下の機会を与えられるべきである。		■ 6. 生徒は以下のことを教えられるべきである。	
e	自分自身の課題に知識を応用しながら、様々な時代や場所の音楽を聴き、その理解を発展させる。	a	吹いたり、擦ったり、ふるわせたり、声に出したりするなど、音が様々な方法でどのように出されるのかを認識する。
		b	落ち着かせたり、興奮させたりするなど、特定の効果を得るために音楽においてどのように音が用いられるのかを認識する。
		c	音楽がどのような様々な時代や場所から生まれるのかを認識する。
f	自分自身や他の人の作品や演奏を含む、生演奏や録音された音楽に反応し、評価する。	d	ダンスや他の適した表現方法による音楽作品の音楽的要素、変わりゆく性格、雰囲気認識する。
		e	日常の音を含む、出したり、聴いたり、演奏したり、作曲したり、感じたりした音を単純な言葉で描写する。

キーステージ 2		Listening and Appraising	
■ 4. 生徒は以下の機会を与えられるべきである。		■ 6. 生徒は以下のことを教えられるべきである。	
e	自分自身の課題に知識を応用しながら、様々な時代や場所の音楽を聴き、その理解を発展させる。	a	教室の楽器などの、多様な楽器の音や楽器を組み合わせ出た音を認識する。
		b	声、楽器、演奏など、どのように音楽的要素や素材が雰囲気や効果を伝えるために用いられるのかを認識する。
		c	音楽が創作された時代や地域に反映される方法を識別する。
f	自分自身や他の人の作品や演奏を含む、生演奏や録音された音楽に反応し、評価する。	d	対称的な音楽的慣習から音楽を比較し、ダンスや別の適切な表現形式を通してするなど、性格や雰囲気における差異に反応する。
		e	考えを支えるための音楽的語彙や音楽的知識を用いる能力を向上させながら、音楽についてのアイデアや意見を表現する。

キーステージ 3		Listening and Appraising	
■ 4. 生徒は以下の機会を与えられるべきである。		■ 6. 生徒は以下のことを教えられるべきである。	
e	自分自身の課題に知識を応用しながら、様々な時代や場所の音楽を聴き、その理解を発展させる。	a	オーケストラ、合唱、室内楽のような様々な組み合わせや、オペラ、バレエ、ジャズのような様々なジャンルで、どのように素材が用いられているのかを認識する。
		b	音楽が生ずる環境や音楽的要素、素材の使用による個人の反応の影響の受け方を認識する。
		c	様々な時代や地域で用いられる慣習を認識するなど、適切に音楽的総譜を用いて、音楽をその社会的、歴史的、文化的背景に関連づける。
f	自分自身や他の人の作品や演奏を含む、生演奏や録音された音楽に反応し、評価する。	d	作曲者と演奏者の貢献を認めながら、時や場所を超えて音楽的様式や伝統がどのように、そしてなぜ変化するのかを認識する。
		e	音楽的知識や語彙を用いて、意見や好みを表現したり判断したりする。

巻末資料4 ナショナルカリキュラム音楽(1995)の到達目標

キーステージ1

■到達目標2: Listening and Appraising

生徒は短い音楽作品に反応し、繰り返しや音楽的要素の中の変化を認識する。生徒は注意深く聴き、音や音楽作品を単純な用語を用いながら表現し、比較する。

キーステージ2

■到達目標2: Listening and Appraising

生徒は音楽に反応し、性格や雰囲気における変化を認識し、音楽的要素や素材が雰囲気とアイデアを伝えるためにどのように用いられるのかを認識する。生徒は、自分自身の課題を評価し、改善され得る方法を認識する。生徒は、どのように音楽が、時や場所、そして作曲者と演奏者の意図によって、影響を受けるのかを認識し始める。生徒は詳細に注意を払って聴き、音楽的語彙を用いながら、様々な伝統から音楽を描写し比較する。

キーステージ3

■到達目標2: Listening and Appraising

生徒は、音楽に反応し、多様な様式や伝統の中で使用された慣習を認識する。生徒は、性格や雰囲気における変化を分析し、音楽の効果を評価する。生徒は批判的に自分自身の作品を *appraise* し、自分の意図や他の人の批評を考慮する。生徒は、同じところに留まる性格や変化する性格を認識しながら、時と場所を超えて音楽を比較する。生徒は音楽的語彙を適切に使用する。

特に優れた成果

■到達目標2: Listening and Appraising

生徒は、様々な時代や場所で用いられている素材や慣習を認識する。生徒は様々な演奏や音楽的課題の解釈を評価し、自らの課題を批判的に *appraise* し、改善する。生徒は、様々な時代や文化から音楽的伝統の範囲の中の連続性と変化を認識し、音楽とその歴史的、社会的、文化的背景を関連づける。生徒は正確で広範囲に渡る音楽的語彙を用いる。

(* Department for Education, *Music in the National Curriculum (England)*, London: HMSO, 1995. より, 訳出)